

今日の福音書には、生まれた時から目の見えない人が出てきます。イエスさまはこの人に近づき、その目を癒してくださいました。そしてこの人は、はじめて世界を見ることができました。

しかし、この出来事は人々の間に大きな議論を起こします。ファリサイ派の人たちは、この出来事を信じません。彼らは言いました。「この人は神から来た人ではない。」

本当に目が見えるようになった人がいるのに、それでも信じません。ここでイエスさまは言われます。「見えない者が見えるようになり、見える者が見えなくなる。」これは、ただ目の話ではありません。信仰の話です。今日はこの物語を、三つの見方から考えてみたいと思います。

第一の見方 人間の見方

人間は「見たい」と思う存在です。未来を見たい。歴史の意味を見たい。そして世界の終わりを見たい。さらに言えば、人は自分の見たいと思うものを、「見てしまう」ものです。マスクをしている人を見ると、その下には好ましい姿を思い描きます。選挙の候補者にも、自分の望む「正しい姿」をあてはめて応援します。

これまで歴史の中で「終末を見た」と言う人たちが何度も現れました。

戦争が起こると、「これは終末のしるしだ」と言う人が現れます。

疫病が広がると、「もう世界は終わりだ」と言う人が現れます。

今の世界でも、そのような声を聞くことがあります。世界が不安定になると、人は恐れます。そして未来を見ようとします。

しかし今日の福音書を見ると、「よく見える」と思っている人たちがほどイエスさまを見ることができませんでした。人間の目は、多くのものを見ることができます。しかし一番大切なものを見失うこともあります。

第二の見方 神の見方

ここでイエスさまの言葉が響きます。

「見えない者が見えるようになり、見える者が見えなくなる。」

これは、神が世界を見る仕方を示しています。神は、人間の考えとは違う仕方で働かれます。強い者より弱い者を、賢い者より小さい者を、神は選ばれることがあります。マルチン・ルターは、このことをとても大切にしました。ルターは言いました。

「神は人間の力や知恵の中ではなく、十字架の中でご自身を現される」

つまり神は人間が栄光を見る場所ではなく、十字架という場所から世界を見ておられるのです。

ヨハネ福音書では、キリストがこの世界に来られたとき、すでに終末は始まったと語られます。光が世に来たとき、すでに裁きは始まっているのです。終末とは、遠い未来の出来事ではありません。キリストにおいて、すでに始まっている現実なのです。

第三の見方 信仰の見方

今日の福音書に出て来た、目が見えるようになった人も、最初からすべてを理解していたわけではありません。彼は少しずつイエスさまを知っていきました。最初は「イエスという方」次に「預言者」「神から来られた方」そして最後に「主よ、信じます。」と信仰を告白します。

この人は、世界の終わりを見たわけではありません。しかし彼はイエス・キリストを見ることができました。それが信仰です。

ルターの言葉として、世界中に知られた、有名な言葉があります。

「もし明日世界が終わるとしても、今日わたしはリンゴの木を植える。」

この言葉が本当にルターの言葉かどうかは、今では分かりません。ある病院の壁に書かれていた言葉ですが、出典は不明です。しかし、この言葉はルターの信仰をよく表しています。

終末とは、恐怖の出来事ではありません。終末とは、キリストが来てくださる時だからです。

救いが完成する時だからです。私たちは未来を見ることはできません。世界がどうなるのか、私たちは知りません。

しかし一つだけ、確かなことがあります。それはキリストが私たちのところに来てくださるということです。福音の言葉の中で、洗礼の水の中で、聖餐のパンと杯の中で、キリストは今日も私たちのところに来てくださいます。

だからキリスト者は、恐れの中で生きるのではなく、希望の中で生きます。

世界が不安に満ちていても、私たちは今日も 祈り、働き、愛し合い、福音を語ります。なぜなら私たちは知っているからです。

世界の終わりは、破滅ではなくキリストの勝利だからです。

イエスさまは今日、私たちにも聞いておられます。

「あなたは人の子を信じるか。」

この問いに、私たちもあの人と同じように答えたいと思います。

「主よ、信じます。」

信仰の中で、私たちは恐れではなく、希望の中で歩むことができます。 アーメン。